

Cognitive Semantic Analysis of Japanese and English Polysemous Words : "nomu" and "to drink"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 皆島, 博, Minashima, Hiroshi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/00028605

日英多義語の認知意味論的分析

— 「ノム（飲む）」と“to drink”—

皆 島 博^{*1}

(2020年9月28日 受付)

内容要約 本論は、日本語の多義動詞「ノム（飲む）」とそれに対応する英語の多義動詞“to drink”を取り上げ、その意味拡張のプロセスについて、認知意味論の理論的枠組みにおいて分析する。また、日英対照言語学の観点から、「ノム」と“to drink”の多義構造における類似点と相違点についても考察する。

キーワード：多義語・多義性・意味拡張・放射状カテゴリー・認知意味論・日英対照言語学

1. はじめに

本論では、日本語の動詞「ノム（飲む）」と英語の動詞“to drink”を取り上げ、その多義構造および意味拡張のプロセスとその動機付けについて、認知意味論の観点から分析を行う。日本語の「ノム」と英語の“to drink”は、それぞれ、次のような、少なくとも3つの異なった語義（多義語の個別の意味）で用いられる点で多義的であるといえる。

- (1) a. 牛乳をノム（飲み物を飲む）
b. 言葉をノム（出かけたものを止める）
c. 要求をノム（申し出等を受け入れる）
- (2) a. Mary drank a glass of water.（メアリーは水を一杯飲みました）
b. I don't drink at all.（私はまったく酒は飲みません）
c. Let's drink to the New Year!（新年を祝って乾杯しましょう）

認知意味論では、上のような日本語の「ノム」と英語の“to drink”が提示するさまざまな語義は

^{*1}教育・人文社会系部門総合グローバル領域

無秩序に派生してきたものではなく、プロトタイプの意味（基本義）を起点として、そこからなんらかの認知的動機付け、すなわち、メタファー（隠喩）、メトニミー（換喩）、シネクドキ（提喩）によって意味拡張を展開し、相互に関連のある意味と意味とのネットワーク、すなわち、放射状カテゴリーを構成するようになったと考える。本論の目的は、「ノム」と“to drink”に関して、次の4点について、認知意味論の立場から記述を行い、それらを明らかにすることである。

- ① 「ノム」と“to drink”の複数の語義の区別
- ② 「ノム」と“to drink”のプロトタイプの意味（基本義）の仮定
- ③ 「ノム」と“to drink”の意味拡張の動機付け（メタファー・メトニミー・シネクドキ）の認定
- ④ 「ノム」と“to drink”の多義構造にみられる類似点と相違点の指摘

なお、「ノム」と“to drink”は、自動詞としても他動詞としても用いられるが、本論では、意味の記述に当たりこの統語上の区別¹⁾は無視する。

2. カテゴリーとしての多義語

ある語が相互に関連した複数の意味を持っていることを多義性といい、また、そういう語を多義語という。例えば、英語の“eye”という語には、次のような意味がある（『ライトハウス英和辞典』の記述を一部修正・省略して引用）：

- ① 目, 眼
- ② 視力, 視覚, 視線
- ③ 観察力, 見分ける力, 鑑賞力, 眼力
- ④ 目つき, 目もと
- ⑤ 目の形をしたもの; 台風の目

認知意味論では、多義語を一種のカテゴリー、すなわち、複数の語義の集合と考える（初山・深田 2003: 141）。カテゴリーとは、現実世界に存在するさまざまなモノをグループ分け（分類）して、ひとまとめにして捉える心の働き（認知）をいう。多義語は、相互に関連した複数の意味をひとまとめにして、その構成員としての語の個々の意味から構成される、という点でカテゴリーを構成しているといえる²⁾。

認知意味論のカテゴリー観では、カテゴリーのすべての構成員が構成員であるための必要十分条件を満たしている必要はない。むしろ、構成員の間に中心的なものと周辺的なものとの区別が存在するだけであると考え。また、他のカテゴリーとの間の境界線も曖昧なものであると考え

る。これらの点が、カテゴリーのすべての構成員は、プラス（+）かマイナス（-）かの二項対立に基づいて決定される必要十分条件を満たしている必要があり、また、他のカテゴリーとの間の境界線も明確なものと考えていたアリストテレスの時代の古典的カテゴリー観と異なっている。認知意味論のカテゴリー観では、カテゴリーには次のような特徴があることが提案されている（Wittgenstein 1978；Labov 1973；Rosch 1975；Lakoff 1987）：

- ① カテゴリーの構成員は家族的類似を示す
- ② カテゴリーの構成員には典型的事例が存在する
- ③ カテゴリーの構成員はプロトタイプ効果を示す

まず、「家族的類似」とは、カテゴリーの全構成員は共通の性質を持っているわけではないが、各構成員が部分的にどこかで共通の性質を持つことによって、カテゴリー全体の統一性が保たれていることをいう。次に、「典型的事例」とは、カテゴリーの構成員の中には、最もわかりやすい例、つまり、代表的な構成員であるプロトタイプが存在することをいう。最後に、「プロトタイプ効果」とは、カテゴリーの構成員は均質なものではなく、典型的なものとはそうでないものに分かれ、構成員間でカテゴリーへの帰属度に程度差が存在していることをいう。

上で引用したカテゴリーとしての多義語“eye”に当てはめると、①～⑤の各語義がカテゴリーの構成員ということになる。そして、カテゴリーを構成するということは、カテゴリーの3つの特徴を示すということになる。したがって、カテゴリーの構成員（各語義）の間には、典型的な意味（プロトタイプ）とそうでない意味（非・典型的な意味）との違いが存在し（プロトタイプ効果）、全く同一の意味はないが、部分的に類似した意味が混在することによって、カテゴリー全体としての統一を保っている（家族的類似）と考えられる。

ところで、一つの語が多義性を獲得することを認知意味論では意味拡張といい、それはカテゴリー拡張の結果生じたものとする（Lakoff 1987；Sweetser 1990；Taylor 1995）。認知意味論では、多義語というカテゴリーは、古典的カテゴリー観の要件を満たすものではないので、そこには中心的構成員（プロトタイプの意味）とそれ以外の周辺の構成員とが混在する。なお、プロトタイプの意味（基本義）とは、複数の意味の中で最も基本的な意味のことで、意味拡張の起点となる意味であるが、主として、次のような特徴と傾向性をもつ（Dirven and Verspoor 1998；初山 2002；瀬戸 2007a；高橋 2010；瀬戸他 2017）：

- ① 文脈なしで最も想起されやすく、身体性・具体性が高い、文字通りの意味。
- ② 言語習得の早い段階で獲得される意味。
- ③ 他の転義を理解する前提となる、あるいは、他の転義との関連性が自然に説明できる意味。
- ④ 使用頻度が高いことが多い意味。

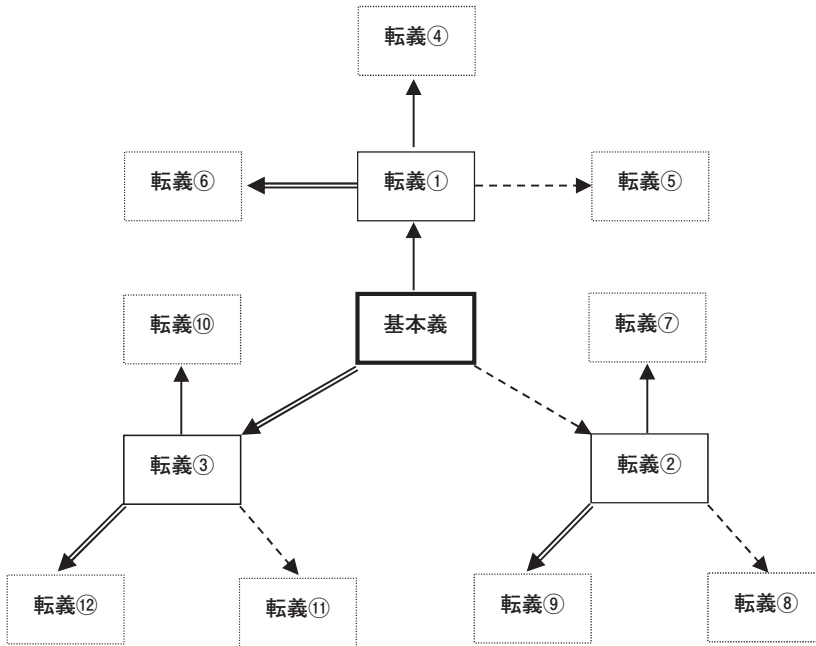
⑤ 慣用表現や比喩で使用されやすい、すなわち、用法上の制約を受けにくい意味。

カテゴリー拡張では、この基本義を起点として「メタファー」「メトニミー」「シネクドキ」と呼ばれる3種類の比喩（認知的動機付け）が要因となり、複数の方向へ語義の意味拡張が展開する。これらについて、佐藤（1992）、瀬戸（1997）、初山・深田（2003）、瀬戸（2007a, b）、瀬戸他（2017）にしたがって、次のように定義する。

- ①**メタファー**：二つの事物の間に存在する何らかの類似性に基づいて、一方の事物を表す形式を用いて他方の事物を表す。
- ②**メトニミー**：二つの事物の間に存在する何らかの隣接性・近接性・関連性・連想に基づいて、一方の事物を表す形式を用いて他方の事物を表す。
- ③**シネクドキ**：一般的な意味（類概念）を持つ形式を用いて特殊な意味（種概念）を表す、逆に、特殊な意味（種概念）を持つ形式を用いて一般的な意味（類概念）を表す。

カテゴリー拡張の最も一般的な形態を放射状カテゴリーと呼ぶ。これは、Lakoff（1987）で提示されたモデルで、中心的構成員（プロトタイプ）を2次の構成員（非プロトタイプ）が取り囲み、その2次の構成員を中心に、それを3次の周縁的な構成員が取り囲む、というように、文字通り、結果として、中心から外へ向かって放射状に拡張していくカテゴリーのことである（辻 2002：238；辻 2013：340）。多義語の放射状カテゴリーのモデルを図示すると下のようになる（辻 2002：238；瀬戸 2007a：5；瀬戸 2007b：41；瀬戸他 2017；辻 2013：340）を参考に作成）。なお、実線矢印はメタファーに、破線矢印はメトニミーに、二重線矢印はシネクドキに動機付けられた意味拡張を表す：

図1 多義語の放射状カテゴリーのモデル



上の図で、中心に位置する「基本義」が中心的構成員（プロトタイプ）で、そこから、それぞれ、メタファー、メトニミー、シネクドキによって、「転義①」、「転義②」、「転義③」の第2次構成員へとカテゴリー拡張をしている。さらに、「転義①」から、それぞれ、メタファー、メトニミー、シネクドキによって、「転義④」、「転義⑤」、「転義⑥」の第3次構成員へとカテゴリー拡張をしている。「転義②」と「転義③」からのカテゴリー拡張についても同様である。ただし、この放射状カテゴリーの図は多義語の意味拡張の理論上のプロセスを図示したモデルにすぎない。したがって、すべての多義語がこのような意味拡張のプロセスをたどるということではないことに注意する必要がある。

3. 日本語「ノム」の多義構造

3.1 「ノム」の複数の意味

ここでは、「ノム」の複数の意味（語義）の区別を行う。語義を区別する指針とするのは国語辞典における意味の分類と語義の定義である。以下、『広辞苑』（9語義）、『大辞林』（8語義）、『大辞泉』（7語義）の3種類の国語辞典の意味の記述を比較する。あまり一般的でない意味、すたれていと思われる意味³⁾は除外して、再整理をすると「ノム」は次のような5系統の意味領域に分類することができる。なお、各定義の冒頭の数字は各辞書における定義の通し番号を表す。

	広辞苑	大辞林	大辞泉
I	①口に入れて嚙まずに食道の方に送りこむ。喉に流しこむ。特に、酒を飲む。	①（液体を）口から腹の中へ入れる。 ②酒を飲む。	①飲食物を口から体内に送りこむ。⑦液体などをのどへ送りこむ。④酒をからだに入れる。
II	③こらえておもてに出さない。	⑦口から出そうになるものを押しとどめる。	⑤外に出さないで抑える。こらえる。
III	④圧倒する。また、見くびる。	⑥相手を圧倒する。	③見くびる。また、圧倒する。
IV	⑤うけいれる。	④受け入れる。	④受け入れる。妥協する。
V	⑥姿を包み込んで見えなくする。	⑤その中に引き込む。	※該当する定義なし
	⑦収める。隠し持つ。	⑧刃物などを隠し持つ。	⑥隠し持つ。

以上、上で再整理したI～Vの5系統の意味領域に基づいて、「ノム」の意味（語義）⁴⁾を区別すると次のようになる。

I 「液体を体内に入れる行為」

語義①〈液体を摂取する〉：概念 {飲み物や液体を、嚙まずに、口から、喉、食道を通して、体の中へ流し入れる}

(3) 毎日水をノムことで、健康には驚くほど良いことばかりです。特に、砂糖いっぱいのジュースをノムくらいなら代わりに水を飲んだ方が、よっぽど良いわけで。人間の体の約70%は水分でできており、医者によっては、健康のためには1日コップ8杯の水をノムと良いと言います。

http://www.lifehacker.jp/2013/10/131027benefits_of_water.html

語義②〈飲酒する〉：概念 {酒などのアルコール飲料を、口から、喉、食道を通して、体内へ流し入れる}⁵⁾

(4) お酒は、コミュニケーションの潤滑剤。人と一緒に楽しみながらノムことをおすすめします。家族とノム、あるいはオンライン飲み会で友人と一緒にノムのはいいでしょう。1人でノムと飲酒量は増え、みんなとノムと飲酒量はほどほどに抑制されます。

<https://toyokeizai.net/articles/-/347671?page=3>

Ⅱ 「なにかに耐えようとする行為」

語義③〈我慢する〉：概念 {息や言葉など，口から出そうになるものを，外に出さないように，こらえて，押しとどめる，抑える}

(5) 「ごめん」。岡山理大付のエースは，最後の攻撃に向かう仲間に向かって小さく謝った。追いつがってもすぐに突き放してくる倉敷工の気迫に押され，春の王者が涙をノんだ。

<http://www.asahi.com/koshien/95/localnews/OSK201307210048.html>

Ⅲ 「人より優位に立とうとする行為」

語義④〈圧倒する〉：概念 {相手を呑み込むかのような，圧倒的な余裕の態度で，スポーツの試合や討論の場などに臨む}

(6) 舞の海氏いわく，小柄な力士は性格が凶太い必要があるという。どんな相手でも，ひるんでしまうと，そこで精神的に不利になってしまうからだ。もちろん相手を甘く見るという意味ではない。「相手をノンでかかるくらいの気持ちでいることを常に心がけていた」と氏は語る。

<http://www.business-plus.net/special/1110/274301.shtml>

Ⅳ 「人の要求などを聞き入れる行為」

語義⑤〈妥協する〉：概念 {相手の要求などを，不本意ながらも認め，無条件にそれを受け入れる}

(7) トヨタがボーナスを「賃金5カ月+30万円」という，労働組合側の要求に満額回答を出しました。また，三菱重工業では，16年ぶりに満額回答となりました。定期昇給などでも組合の要求をノんだ様子です。

<http://www.nudec.jp/information/2713.html>

Ⅴ 「人やものの姿形を見えなくする行為」

語義⑥〈覆い隠す〉：概念 {人やものを，何かの中に引き込んで，その姿を隠す，あるいは，包み込んで見えなくする}

(8) 松江支藩としての広瀬藩が成立し，広瀬の再出発となった1666年（寛文6）年秋，大洪水で

堤防が決壊、濁流が町をノム。富田川は流路を変え、それまでの城下町は川底に沈む。

<http://kelog.seesaa.net/category/774637-1.html>

(9) 昔懐かしい東映任侠映画に欠かせない小道具に「ドス」がある。ラストになると主人公はドスをノんで敵一家に殴りこむ。お馴染みのストーリーである。

<http://blog.goo.ne.jp/tudukimituo1028/m/201009/2>

3.2 「ノム」の意味拡張とその認知的動機付け

上で「ノム」に6個の複数の意味を区別した。ここでは「ノム」の意味拡張とその要因となる認知的動機付けについて考察するが、最初に意味拡張の起点となるプロトタイプの意味(基本義)を仮定する。多義語の複数の意味のうち、プロトタイプの意味が備えた特徴と傾向性を第2節で示したが、それらを考慮すれば、「ノム」の複数の意味の中でも文字通り「身体性・具体性」の高い語義①〈液体を摂取する〉を基本義として仮定するのが妥当であろう。

次に、基本義〈液体を摂取する〉からその他の転義への意味拡張であるが、その認知的動機付けに関しては、飲むという動作との類似性に基づくもの(メタファー的拡張)、あるいは、特定の飲み物を飲むという動作への限定的使用(シネクドキ的拡張)のどちらかに分けられる：

3.2.1 メタファー的拡張

基本義〈液体を摂取する〉⇒転義〈我慢する〉：飲むという行為には、いくつかの側面があるが、口から入れた液体が一旦体内に入れば外には出てこないことは、その一つである。外に出てこないということは内部にとどまっているということである。この点において、「飲み物(液体)を口から取り入れ体内にとどめ、出てこないようにする行為」と「涙や言葉など、外に出てきそうなものを、外に出さないように押しとどめるという行為」との類似性を認めることができる。したがって、この意味拡張はメタファーに動機付けられたものといえる。

基本義〈液体を摂取する〉⇒転義〈圧倒する〉：飲むという行為には、いくつかの側面があるが、液体を飲んでそれが体内に入ってしまった結果、なくなって見えなくなってしまうことは、その一つである。見えなくなるということは存在がなくなるということである。この点において、「飲み物(液体)を飲み込んで、見えなくしてしまう行為」と「相手を飲み込んでしまって存在をなくしてしまうかのような、圧倒的に余裕の態度で試合や論戦などに臨む行為」との類似性を認めることができる。したがって、この意味拡張はメタファーに動機付けられたものといえる。

基本義〈液体を摂取する〉⇒転義〈妥協する〉：飲むという行為には、いくつかの側面があるが、飲み込んだ液体が食道を通過して胃まで流れてしまうもとに戻らないことは、その一つであ

る。一度胃に入った液体はそのまま無条件に受け入れ体内にとどめるしかない。この点において、「飲み物（液体）を飲み込んで体内にとどめる行為」と「人の要求を無条件に受けとめて、逆らわない行為」との類似性を認めることができる。したがって、この意味拡張はメタファーに動機付けられたものといえる。

基本義〈液体を摂取する〉⇒転義〈覆い隠す〉：飲むという行為には、いくつかの側面があるが、液体を体内に取り入れることは、その一つである。液体を体内に入れてしまえば、その液体は見えなくなる。この点において、「飲み物（液体）を飲み込んで、体内に入れた結果として、見えなくしてしまう行為」と「人やものを何かの中に包み込んで見えなくする行為」との類似性を認めることができる。したがって、この意味拡張はメタファーに動機付けられたものといえる。

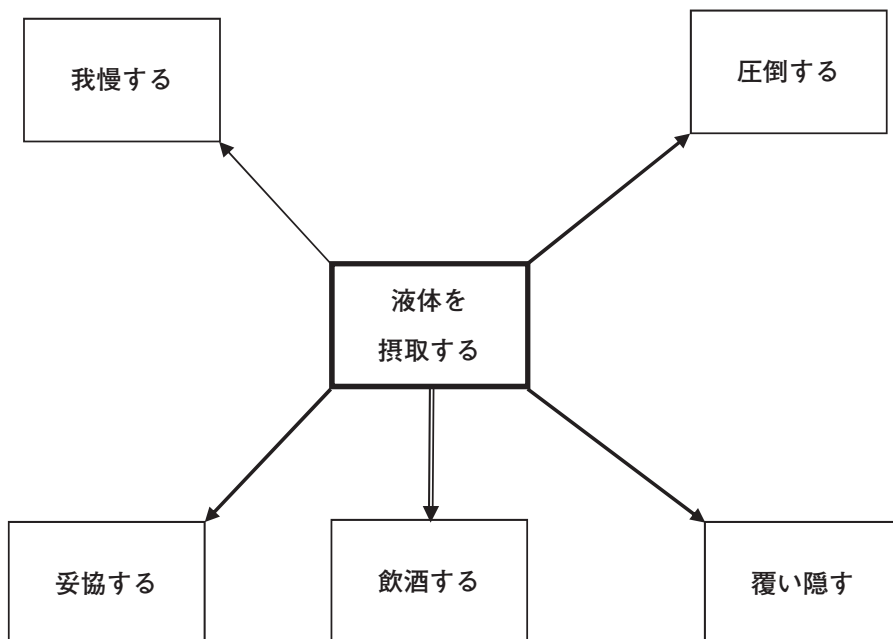
3.2.2 シネクドキ的拡張

基本義〈液体を摂取する〉⇒転義〈飲酒する〉：飲むという行為は飲み物一般を摂取することであるが、この場合、「飲み物一般」（類）を飲むことを「アルコールを含む飲み物」（種）へと転用している。したがって、この意味拡張はシネクドキに動機付けられたものといえる。

3.3 「ノム」の意味のネットワーク

上で「ノム」に対し6個の語義を区別し、基本義を仮定した。そして、そこから各転義への意味拡張を展開する際に、どのような認知的動機付けを経て新たな語義を獲得するのか、ということも認定した。その結果、「ノム」は下のような放射状カテゴリー（意味のネットワーク）を構成すると仮定できる。なお、下の図で、実線矢印はメタファーに、二重線矢印はシネクドキに動機付けられた意味拡張を表す。

図2 「ノム」の放射状カテゴリ



4. 英語“to drink”の多義構造

4.1 “to drink”の複数の意味

ここでは、“to drink”の複数の意味（語義）の区別を行う。語義を区別する指針とするのは英英辞典における意味の分類と記述である。以下、*Longman Dictionary of Contemporary English*（以後、LDCE, 2語義）、*Oxford Advanced Learner's Dictionary*（OALD, 2語義）、*Merriam-Webster Dictionary*（MWD, 6語義）の3種類の英英辞典を参照する。3種類の英英辞典の意味の記述（便宜上、日本語に訳して引用）を比較する。再整理をすると“to drink”は次のような5系統の意味領域に分類することができる。なお、各定義の冒頭の「自／他」は自動詞と他動詞の区別を、冒頭の数字は各辞書における定義の通し番号を表す。

	LDCE	OALD	MWD
I	[他 /] ①液体を口の中に入れてそれを飲み込む	[他 / 自] ①液体を口の中に入れてそれを飲み込む	[自] ① (a) 飲み込むために口の中に液体を入れる [他] ① (a) 液体を飲む, 口の中に飲み込む
II	[自] ②特に定期的に, または大量にアルコールを飲む	[他 / 自] ②アルコールを飲む (特に定期的に飲む場合)	[自] ②アルコール飲料を飲む

Ⅲ	※該当する定義なし	※該当する定義なし	[他] ③アルコール飲料を飲む ことで特定の状態に至らせる
Ⅳ	※該当する定義なし	※該当する定義なし	[自] ③乾杯する, または乾杯 に参加する [他] ②乾杯に参加する
Ⅴ	※該当する定義なし	※該当する定義なし	[他] ① (b) 摂取する, また は吸い上げる, 吸収する [他] ① (c) 熱心に取り入れ る, または受け入れる [自] ① (b) 自分の意識の中 に受け入れる

I 「液体を体内に入れる行為」

語義① 〈液体を摂取する〉：概念 {容器などの中の液体を, 口の中に入れて, 飲み込む}

(10) We all know that water is good for us, but often the reasons are a little fuzzy. And even if we know why we should drink water, it's not a habit that many people form. (水が体に良いことはみんな知っていますが, その理由は少しばかりあいまいなことが多々あります。なぜ水を飲まなければならないかわかっていたとしても, 多くの人がやっていることではありません)

<https://jp.pinterest.com/pin/553098397968624593/>

II 「アルコール飲料を体内に入れる行為」

語義② 〈飲酒する〉：概念 {特に定期的に, あるいは, 大量にアルコール飲料を摂取する}

(11) Most people who have alcohol-related health problems aren't alcoholics. They're simply people who have regularly drunk more than the recommended levels for some years. (アルコールに関連した健康上の問題を抱えるほとんどの人はアルコール依存症ではありません。彼らは何年かにわたって, 推奨される量以上を定期的に飲んできた人たちに過ぎません)

<http://www.thekerpractice.co.uk/Library/livewell/topics/alcohol/effectsofalcohol>

Ⅲ 「飲酒をすることで至る状態」

語義③ 〈飲酒で～となる〉：概念 {アルコール飲料を飲むことによって、ある特定の状態に至る}

(12) You can always drink yourself asleep or take diphenhydramine pills then you'll be a sleepy bear. (いつだってお酒を飲んで寝ることもできるし、そうでなければ、ジフェンヒドラミン錠を飲めばぐっすり眠れるでしょう)

<https://www.drugs.com/comments/diphenhydramine/for-insomnia.html>

(13) As research reveals the toll alcohol takes on career women, read how this brilliant solicitor drank herself to death at only 39-years-old. (キャリアウーマンたちにもたらされたアルコールの損害を研究が示しているように、いかにこの有能な弁護士が、飲酒のためにわずか39歳で死に至ったか、お読み下さい)

<http://www.dailymail.co.uk/health/article-299316/My-sister-drank-death.html>

Ⅳ 「飲酒をすることに伴う行為」

語義④ 〈乾杯する〉：概念 {人に敬意を表して、あるいは、なにかの機会に乾杯に参加する}

(14) Mr. Aikenhead was present, and accompanied them to Goslin's. At the hotel Mr. Aikenhead said, "Drink my good health." (エイクンヘッド氏も出席し、彼らとゴスリンに同行しました。そして、ホテルで氏は、「私の健康に乾杯」と言いました。)

<http://trove.nla.gov.au/newspaper/article/9429947>

Ⅴ 「何かを内部に取り入れる行為」

語義⑤ 〈吸収する〉：概念 {なにかを中に吸い込む、あるいは、ものごとを感覚や知性を通して意識の中に入れ入れる}

(15) It was a warm summer rain and the ground drank deeply of the raindrops as they pelted the grass. (暖かい夏の雨でした、そして、草原に降り注ぐ雨粒を地面は深く吸い込みました)

<https://books.google.co.uk/books?id=dYJnGsLMs3UC&pg>

(16) I wanted to listen and drink in every word that came out of my families mouths. (私は、家族の口から出てきたことに耳を傾け、一語一語を噛みしめたかったです)

<http://chelseataalkssmack.blogspot.jp/2007/12/feeling-of-christmas.html>

4.2 “to drink”の意味拡張とその動機付け

上で“to drink”に5個の複数の意味を区別した。ここでは“to drink”の意味拡張とその要因となる認知的動機付けについて考察するが、最初に意味拡張の起点となるプロトタイプの意味（基本義）を仮定する。多義語の複数の意味のうち、プロトタイプの意味が備えた特徴と傾向性を第2節で示したが、それらを考慮すれば、“to drink”の複数の意味の中でも文字通り「身体性・具体性」の高い語義①〈液体を摂取する〉を基本義として仮定するのが妥当であろう。

次に、基本義〈液体を摂取する〉からその他の転義への意味拡張であるが、その認知的動機付けに関しては、飲むという動作との類似性に基づくもの（メタファー的拡張）、飲むという動作との隣接性・連想性に基づくもの（メトニミー的拡張）、特定の飲み物を飲む動作に限定した使用（シネクドキ的拡張）のどれかに分類できる：

4.2.1 メタファー的拡張

基本義〈液体を摂取する〉⇒転義〈吸収する〉：何かを吸収する行為には、実体のある物を中に取り入れる場合と抽象物を頭の中に取り入れる場合とがある。しかし、いずれも何かを飲むかのように中に取り入れるという点で共通している。したがって、これは行為の特性の類似性に基づくメタファーに動機付けられた意味拡張といえる。

4.2.2 シネクドキ的拡張

基本義〈液体を摂取する〉⇒転義〈飲酒する〉：飲むという行為は飲み物一般を摂取することであるが、この場合、「飲み物一般」（類）を飲むことを「アルコールを含む飲み物」（種）へと転用している。したがって、この意味拡張はシネクドキに動機付けられたものといえる。

4.2.3 メトニミー的拡張

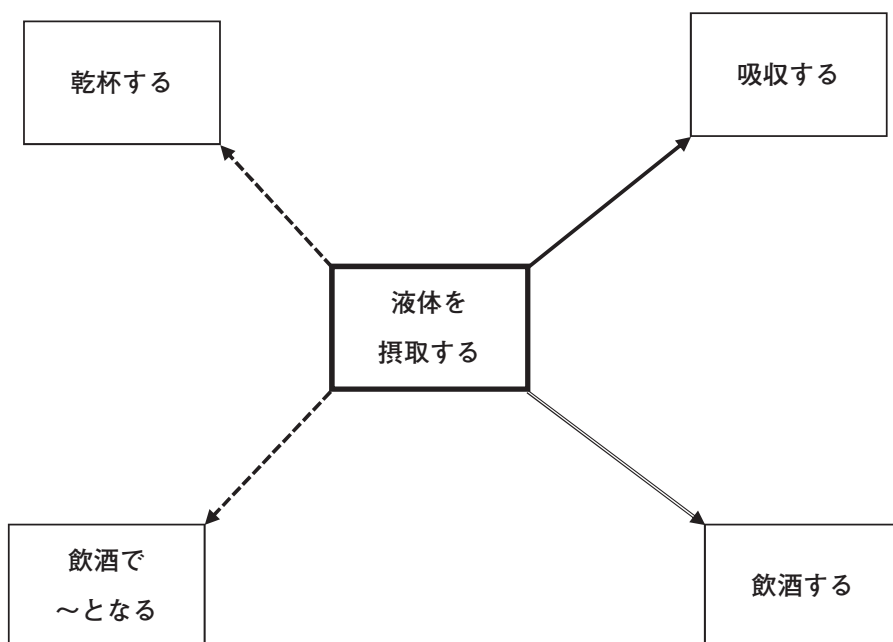
転義〈飲酒する〉⇒転義〈乾杯する〉：乾杯をするということは、その後にアルコール飲料を飲むという事態に移行するのが通常である。したがって、これは行為の時間的近接性に基づくメトニミーに動機付けられた意味拡張といえる。

転義〈飲酒する〉⇒転義〈飲酒で～となる〉：アルコール飲料を恒常的に摂取していると、それが原因となってその帰結として身体にさまざまな影響が出てくることがある。したがって、これは行為の時間的近接性に基づくメトニミーに動機付けられた意味拡張といえる。

4.3 “to drink”の意味のネットワーク

上で“to drink”に対し5個の語義を区別し、基本義を仮定した。そして、そこから各転義への意味拡張を展開する際に、どのような認知的動機付けを経て新たな語義を獲得するのか、ということも認定した。その結果、“to drink”は下のような放射状カテゴリー（意味のネットワーク）を構成すると仮定できる。なお、下の図で、実線矢印はメタファーに、破線矢印はメトニミーに、二重線矢印はシネクドキに動機付けられた意味拡張を表す。

図3 “to drink”の放射状カテゴリー



5. おわりに

本論では、日本語「ノム」と英語“to drink”について、認知意味論の考え方を利用してその多義構造を分析した。その結果に基づいて、「ノム」と“to drink”の多義構造及び意味における類似点と相違点について、日英対照言語学的見地から述べると次のようになる。

- ① 「ノム」と“to drink”は多義語であり、放射状カテゴリーを構成する。
- ② 「ノム」と“to drink”のプロトタイプの意味（基本義）として、身体性及び具体性の高い〈液体を摂取する〉を仮定するのが妥当である。
- ③ 「ノム」と“to drink”に共通する転義として、シネクドキに動機づけられた〈飲酒する〉がある。
- ④ 「ノム」には、「液体を口の中に入れて体内におさめてしまう」という行為の特性との類似性に

基づく〈我慢する〉〈圧倒する〉〈妥協する〉〈覆い隠す〉というメタファーに動機付けられた意味拡張が見られたが、これに対し、“to drink”では〈吸収する〉という意味だけである。

- ⑤ “to drink”には、酒（アルコール飲料）を飲むという行為に隣接するあるいは連想される〈乾杯する〉〈飲酒で～となる〉というメトニミーによる意味拡張が見られたが、これに対し、「ノム」にはこれらと意味拡張の方向性が共通する転義は見られなかった。

後注

- 1) 本論は、語の意味に関する研究であるので、自動詞と他動詞の違いは、統語論的な違いに過ぎないという立場を取り、「自他一体記述」を行う。自他一体記述とは、瀬戸（2007：7-8）によれば、「英和辞書は、一般に、自動詞と他動詞を分離して記述する。自動詞と他動詞の区別は、外国語としての英語の学習には必須の情報だとの教育的判断が背後にあると推測される。他方、海外の英英辞典、とりわけ教育的な配慮から編集された学習英英辞典は、こぞって自他を一体記述する。この判断の違いはどこからくるのだろうか。たとえば、eatの自他に着目してstart eating (breakfast)の表現を見ると、breakfastのあるなしは、目的語が明示されるか否かの違いだけであり、「食事をする」というeatの意義に大差はない。にもかかわらず、英和辞典は、他動詞の「食事をする」と自動詞の「食事をする」を、まるでまったく無関係であるかのように遠く離して別個に記述する。意義のまとまりと関連を体系的に記述するという目的からすれば、このような事例は、自他を一本化して記述するのが望ましい」という立場である。
- 2) 認知意味論では、人間を、意味を読み取り、意味を発信する主体とみなし、「意味」については、人間の身体性（感覚・知覚・認知など）の総合的な営みを通じて概念化されたものとする。そして、概念化することはカテゴリー化することと同じであるという立場を取る。
- 3) 「広辞苑②：吸い込む。吸う」、「新辞林③：タバコを吸う」、「大辞泉②：吸い込む。吸う」は現代では一般的な意味ではなく、「広辞苑⑨：謡曲の特殊な発音法の一」は古風あるいは廃れた意味であり、また、「広辞苑⑧：呑行為をする、大辞泉⑦：呑み行為をする」は俗語的かつ語源が不明確と思われるので、本論では分析の対象外とする。
- 4) 本論では、意味の記述に2つのレベルを設ける。一つは、「語義」で〈…〉で囲んで表す。もう一つは、「概念」で「…」で囲んで表す。「語義」と「概念」は、それぞれ語の意味の一側面を構成する。「語義」は、語の意味をなるべく簡潔に、ワンフレーズで収まるようにまとめた記述である。「概念」は、語の意味をなるべく、具体的に、詳細に、百科事典的意味をも交えて、まとめた多面的記述である。
- 5) 次のような例文「今度胃カメラをノムのですが、胃カメラってどんな感じですか？見ているだけで気持ち悪いので…（http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q104895240）」にある「ノム」のように、「飲食物以外の異物を、口から入れて、体内に送り込む」という辞書に記述のない意味もあるが、これはメタファーによる拡張であろう。

参考文献

- Dirven, René and Marjolijn Verspoor (1998) *Cognitive Exploration of Language and Linguistics*. Amsterdam: John Benjamins.
- Labov, William (1973) The Boundaries of Words and Their Meanings. In: Charles-James N. Bailey and Roger W. Shuy (eds.) *New Ways of Analyzing Variation in English*, 340-373. Washington: Georgetown University Press.

- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 初山洋介 (2002) 『認知意味論のしくみ』(シリーズ・日本語のしくみを探る⑤) 東京: 研究社.
- 初山洋介 (2014) 『日本語研究のための認知言語学』 東京: 研究社.
- 初山洋介・深田智 (2003) 「意味の拡張」松本曜 (編) 『認知意味論』(シリーズ認知言語学入門第3巻) 73-134. 東京: 大修館書店.
- Rosch, Eleanor (1975) Cognitive Representations of Semantic Categories. *Journal of Experimental Psychology: General* 104: 192-233.
- 佐藤信夫 (1992) 『レトリック感覚』講談社学術文庫.
- 瀬戸賢一 (1997) 「第Ⅱ部 意味のレトリック」巻下吉夫・瀬戸賢一『文化発想とレトリック』(日英語比較選書①) 94-177. 東京: 研究社.
- 瀬戸賢一 (編) (2007a) 『英語多義ネットワーク辞典』 東京: 小学館.
- 瀬戸賢一 (2007b) 「メタファーと多義語の記述」楠見孝 (編) 『メタファー研究の最前線』 31-61. 東京: ひつじ書房.
- 瀬戸賢一・山添秀剛・小田希望 (2017) 『[認知言語学演習②] 解いて学ぶ認知意味論』 東京: 大修館書店.
- Sweetser, Eve (1990) *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 高橋英光 (2010) 『言葉のしくみ—認知言語学のはなし』 札幌: 北海道大学出版会.
- Taylor, John R. (1995) *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford: Clarendon Press.
- 辻幸夫 (2002) 『認知言語学 キーワード辞典』 東京: 研究社.
- 辻幸夫 (2013) 『新編 認知言語学キーワード辞典』 東京: 研究社.
- Wittgenstein, Ludwig (1978) *Philosophical Investigations* (trans. G.E.M. Anscombe). Oxford: Basil Blackwell.

参照国語辞典

- 『大辞林』(三省堂, 第3版)
 『大辞泉』(小学館, 第2版)
 『広辞苑』(岩波書店, 第5版)

参照英英辞典

- Longman Dictionary of Contemporary English* (オンライン版)
Merriam-Webster Dictionary (オンライン版)
Oxford Advanced Learner's Dictionary (オンライン版)

参照英和辞典

- 『ライトハウス英和辞典』(研究社, 初版)

例文検索ウェブサイト

- <https://www.google.com/>